

活動報告

インターナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム参加報告

Report on the International Visitor Leadership Program

兒玉 友

Yu KODAMA

日本福祉大学 スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

1. はじめに

インターナショナル・ビジター・リーダーシッププログラム (IVLP) は、アメリカ国務省の教育・文化局が主催して行っている交流プログラムである。このプログラムは1942年から続く、歴史あるプログラムであり、日本からは、年間約40名が参加し、これまでに2,500人以上、世界中では約20万人以上が参加している。

プログラムの目的は、職業上の関心事項についてアメリカの専門家と直接意見交換をする機会の提供とその分野に関するアメリカの現状とその背景、将来の方向などについての理解の促進と、各地域の様々なバックグラウンドをもった一般のアメリカ人と交流することにより、幅広くアメリカの文化に触れ、その多様性についての理解の普及である。

プログラム参加対象者は、中央および地方の政府、マスコミ、教育、経済など日本とアメリカの双方にとって関心のある分野で指導的な立場にある者、あるいは今後そうした立場に立つ可能性のある者などである。年齢は、30代～40代で、組織の中で中堅として活躍している者、米国への渡航経験が少ない者が優先されて選ばれている。

2. 今回のプログラムの概要

「Disability Access and Inclusion」をテーマとし、3週間にわたり、4つの都市（ワシントン D.C., ピッツバーグ, コロラドスプリングス, シアトル）を訪問した。目的は、アメリカの障害者政策を学ぶこと、障害者を支援するアメリカの企業・職場・スポーツの現場を視察すること、そして障害者権利について学ぶことなどであった。主な参加者は、当事者研究（障害のある人自身の研究）分野の専門家、視覚障害のあるパラリンピアン、地方議員、障害者の就労支援・自立支援事業者であった。筆者は、障害者スポーツ分野の専門家として参加した。

主な視察先は、アメリカ合衆国国務省、インクルーシブ教育に取り組む公共施設、障害者雇用に取り組む企業やバリアフリーに配慮した施設、アメリカ・オリンピック・トレーニングセンターなどであった。アメリカの障害者を取り巻く政策は、1990年7月に障害を持つアメリカ人法（ADA: Americans with Disabilities Act of 1990）が基盤となっている。その法律の成立により、対象となる様々な機関で障害者差別が禁止され、障害者の人権保障と社会参加が促進されることとなった。

本稿では、今回視察した中でも特徴的なプログラムを挙げ、その内容について紹介する。

### 3. 具体的なプログラム

#### 3-1 インクルーシブ教育

インクルーシブ教育の視察先として、ワシントンD.C.にある Bridges Public Charter School を訪問した。ここは2005年に設置された公立学校で、障害の有無にかかわらず教育が受けられ、その中では生徒それぞれのニーズを満たす工夫やインクルーシブ教育を目指す取り組みが行われている。

生徒数は普通学校と大きな違いはないものの、36%が配慮を必要とする生徒であり、障害のない子どものうちの半数が英語を第二外国語としている者となっている。障害の有無や程度にかかわらず、1人の生徒につき5人程度の教員がサポートを行い、授業以外の昼休みや給食の時間などでも共に時間を過ごしている。

また、教師との関わりとは別に、特別支援教育チームが編成され、作業療法、言語療法、音楽療法などのセラピストや各種障害の専門家が連携しながら、幅広い生徒のニーズに対応している。

障害の有無にかかわらず共に学ぶことで、障害のある子どもは、健常者との接し方を知る機会が得られ、障害のない子どもは、幼い頃から障害のある人との接し方を理解していくことが可能となる。

我が国においては、障害の種類や程度等に応じて、特別な配慮の下に、特別支援学校や小学校・中学校の特別支援学級等で適切な教育を行うことが基本的な考え方とされている。確かに運動会やイベントなどの限られた機会の中で、障害のある子どもとない子どもが共に学び合う時間が設けられているものの、両者の関わりの機会では大きな違いが見られる。



写真1 ミーティングの様子



写真2 授業の様子



写真3 授業の様子



写真4 ブランコを活用したセラピー



### 3-2 インクルーシブキャンプ

ピッツバーグにある BLOOM learning center では、就学前も含めた子ども全般を対象とし、障害の有無にとらわれず総合的な自立支援プログラムを展開している。そこでは、それぞれのニーズに合わせてキャンプや運動技能習得のためのプログラムを行っているが、中でも特徴的なのは、リバーインクルージョンの考え方をういたプログラムである。これは、障害のある子どもたちのプログラムに、障害のない子どもたちが参加する形式のプログラムである。通常のプログラムを障害の特性に配慮して進めるのではなく、障害のある子どもたちのニーズに合ったプログラムを、障害のない子どもたちが一緒に行うことで、互いの理解や障害の理解等を進めていくことが目的とされている。

参加者は主に、知的障害のある子ども、肢体不自由、発達障害のある子どもとなっており、介助者及びカウンセラースタッフは、過剰なサポートになることを避けながら一緒に参加をするスタイルが取られていた。

プログラム内容には、スポーツレクリエーションも含まれており、主に車いすバスケットボールや水泳が実施されている。地域で活動する障害者スポーツ団体も参加し、練習日や場所などの情報を提供しながら、継続的にスポーツを楽しむことができるよう工夫がされている。



写真5 キャンプ場内



写真6 プール内



写真7 プール内看板

### 3-3 パラスポーツ強化

オリンピック・パラリンピックを目指す選手を対象としたトレーニング施設であるコロラドスプリングスにある、アメリカ・オリンピック・トレーニングセンターを視察した。コロラドスプリングス市からの財政的な支援等があるため、オリンピック・パラリンピックを目指す選手らは経済的負担なく日々練習等を行っている。

ここでのパラリンピックに対する取り組みとしては、競技大会の開催や合宿の実施などがある。バスケットコート3面分確保できる体育館では、パラバドミントンの国際大会などが行われ、当日は、車いすバスケットボールの選手が強化練習を行っていた。こうした活動の中で、健常者と障害者が同じ場で共同利用しながら、強化を図っていく工夫も行われていた。





写真8 トレーニングルーム内



写真9 トレーニングルーム内



写真10 視察の様子



写真11 車いすバスケットボールの練習の様子

#### 4. まとめ

IVLPに参加し、中でも特徴的な取り組みについて紹介をした。アメリカでは、ADAなどの法律に基づき、州ごとに政策を打ち出し事業を展開しているが、州によって対応や政策が異なることなどの課題がある。しかし、健常者と障害者が同じ場で活動することや同じ施設を利用するといった考え方や取り組みは、我が国の今後の政策に対して大いに参考になると考えられる。

例えば、アメリカのインクルーシブ教育やインクルーシブキャンプの発想を我が国の障害者スポーツの活動に取り入れていくことで、新しい考え方を含んだプログラムを展開していけるのではないだろうか。障害者のスポーツを通じた社会参画やスポーツを通じた心のバリアフリーの実現が目指されているが、諸外国との交流により発想の幅を広げていくことも重要であると感じられる視察であった。